

ハウス小ナスの栽培法

五十嵐美穂・中西政則

(山形県農業総合研究センター農業生産技術試験場)

Cultivation method of small type eggplant in greenhouse.

Miho IGARASHI and Masanori NAKANISHI

(Department of Agro-Production Science Yamagata General Agricultural Research Center)

1 はじめに

山形市近郊で主に栽培されているハウス小ナスは、果皮が柔らかく良食味であることから、漬けナスとして市場評価が高く、生産の拡大が望まれている。しかし、25g～35g程度の小さいうちに収穫するため、茎葉と果実のバランスが崩れ、過繁茂になりやすく、栄養生長過多となって着果が不安定となる。そのため、過繁茂を回避するための摘葉や着果安定のためのホルモン剤の単花処理は、重要な草勢管理作業となっている。しかし、これら作業の労働時間は大きく、産地拡大を困難にしている。そこで、生産現場では2条植えが大部分を占めていることを踏まえ、栽植様式の違いが、作業性や収量に及ぼす影響について検討した。また、高単価が期待される6月までの早期収量確保のための側枝処理法について検討した。

2 試験方法

試験1：栽植様式(2004年)

試験は、山形県寒河江市内の雨よけハウス(7.2m×22m, ハウスサイド, 出入り口, 妻窓には1mm目合いの白寒冷紗を使用)で行った。試験区は、1条2本(1条植え・2本仕立て・株間35cm), 1条3本(1条植え・3本仕立て・株間50cm), 2条2本(2条植え・2本仕立て・株間50cm), 2条3本(2条植え・3本仕立て・株間70cm)の計4区とした。供試品種は、穂木‘真仙中長’台木‘カレヘン’を用いた。播種は、台木が2003年10月24日、穂木が3日後の10月27日とし、12月10日に幼苗接ぎをした。2004年2月24日に定植し、ハウス内最低気温14℃で加温した。第1,2花を摘花し、収穫は5月1日から開始した。7月12日に主枝当たり2芽を残して切り戻した。8月13日から収穫を再開し、10月20日まで収穫した。収穫は、3S(20～29g)～2S(30～39g)を目安とした。うね幅は180cm, ベッド幅はいずれの区も70cmとした。側枝の処理は、放任とし7月上旬に混み合った部分を間引いた。試験規模は、1区10株の単区制とした。ホルモン処理および摘葉に要する作業時間調査は、植物体が最も繁茂している6月24日に行った。

試験2：側枝処理法(2005年)

試験区は、摘心区(側枝の花上1葉摘心), 放任区(側枝は放任とし、側枝が混み合ってきた場合にのみ間引)

の2区とした。栽植様式は、ベッド幅70cm, 株間35cmの1条植えとした。収穫は、4月11日から開始して、7月25日に主枝あたり1芽を残して切り戻し、10月30日まで行った。試験規模は、1区10株の2区制で行った。その他、播種やハウス内温度管理等については試験1に準じた。

3 試験結果及び考察

試験1 栽植様式

(1)栽植様式の違いが収量に及ぼす影響

表1に示すように、a当たりの商品収量は、2条2本>2条3本>1条2本>1条3本の順に高く、それぞれ663kg, 635kg, 601kg, 482kgだった。商品果率は、3本仕立てと比較して2本仕立てで高く63%だった。

図1にはa当たり時期別累積収量について示した。a当たり商品収量と同様に、収穫初期から2条2本>2条3本>1条2本>1条3本の順に高く推移した。

(2)栽植様式の違いが作業性に及ぼす影響

図2は、6月に行った作業時間調査をもとに、表1に示した収量を得るのに要したホルモン処理と摘葉時間を試算したグラフである。1条2本区でホルモン処理および摘葉時間が最も小さく、次いで1条3本区、2条3本区、2条2本区の順に大きくなると試算された。

試験2 側枝処理法

(1)側枝の処理法が収量に及ぼす影響

全栽培期間を通して、摘心区の摘心は18回(週1回実施), 放任区の間引は2回(7月上旬, 9月下旬)行った。表2に示すように、高単価で取引される6月下旬までのa当たり商品収量は、放任区で325kg, 摘心区で286kgだった。a当たり果数は、放任区でおよそ1000果多かった。

図3には、6月下旬までのa当たり旬別累積収量を示した。放任区では、摘心区と比較して5月中旬から6月上旬にかけておよそ8～10kg高く推移した。

4 まとめ

ハウス小ナス栽培では、a当たりのホルモン処理や摘葉等の整枝作業時間が少なく、草勢管理がしやすい1条植えが適する。また、仕立て本数は、2本にすることでa

当たり商品収量が高くなる。
側枝の処理方法は、花上1葉摘心するよりも放任とし、側枝が混み合ってきた場合に、細く弱い懐枝を中心に適宜間引くことで6月までの早期収量が高くなる。

表1 栽植様式がaあたり収量に及ぼす影響

区名	A果		B果		障害果		総収量		商品果率 ^{z)} (%)	aあたり 商品収量 (kg/a)
	個数 (個)	重量 (kg)	個数 (個)	重量 (kg)	個数 (個)	重量 (kg)	個数 (個)	重量 (kg)		
1条2本	13983	469.8	4124	131.3	10823	270.4	28930	872	63	601
1条3本	10911	374.2	3230	108.1	10989	316.0	25130	798	56	482
2条2本	14896	510.9	4507	151.8	11278	363.0	30680	1026	63	663
2条3本	14489	502.6	3903	132.4	12577	391.7	30968	1027	59	635

z) (A果+B果)/総収穫個数

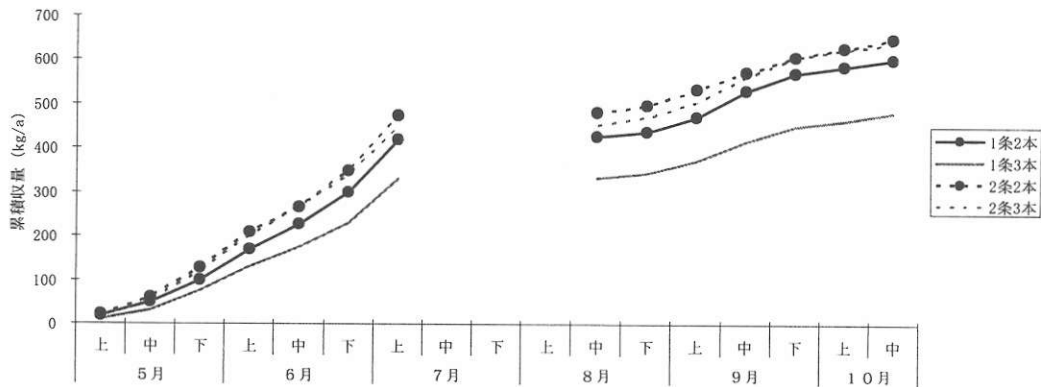


図1 aあたり時期別累積収量の推移

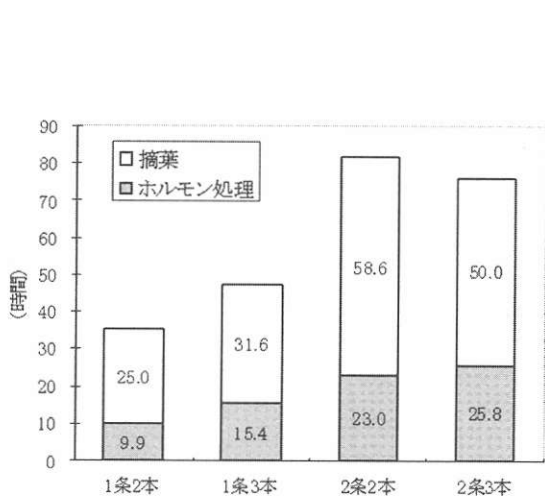


図2 aあたり摘葉、ホルモン処理時間の試算

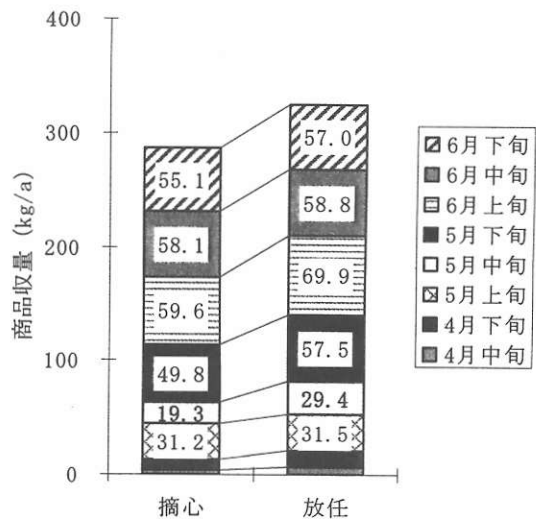


図3 6月下旬までの旬別累積商品収量の推移

表2 側枝の処理法がaあたり収量に及ぼす影響

(20株調査)

区	商品果 ^{z)}						障害果		総収量		商品果率 (%)
	6月下旬まで		7月上旬～10月下旬		合計		個数	重量	個数	重量	
	個数 (個)	重量 (kg)	個数 (個)	重量 (kg)	個数 (個)	重量 (kg)	個数 (個)	重量 (kg)	個数 (個)	重量 (kg)	
摘心	9,693	286	11,921	347	21,614	633	8,398	186	30,012	818	72
放任	10,823	325	12,514	371	23,337	696	8,572	194	31,908	890	73

z) A果、B果の合計